

感染症発生動向調査委員会報告 7月

今月のトピックス

麻疹報告数は引き続き減少

緊急対策として、未接種・未り患者への市費による予防接種(任意接種)を実施中

咽頭結膜熱、手足口病、ヘルパンギーナ等、夏の感染症がピークを迎えている

腸管出血性大腸菌感染症はやや増加傾向

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：88か所、内科定点：57か所、眼科定点：18か所、性感染症定点：26か所、基幹(病院)定点：3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

平成20年 週 - 月日対照表

第26週	6月23～29日
第27週	6月30～7月6日
第28週	7月7～13日
第29週	7月14～20日
第30週	7月21～27日

平成20年6月23日から平成20年7月27日まで(平成20年第26週から第30週まで。ただし、性感染症については平成20年6月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

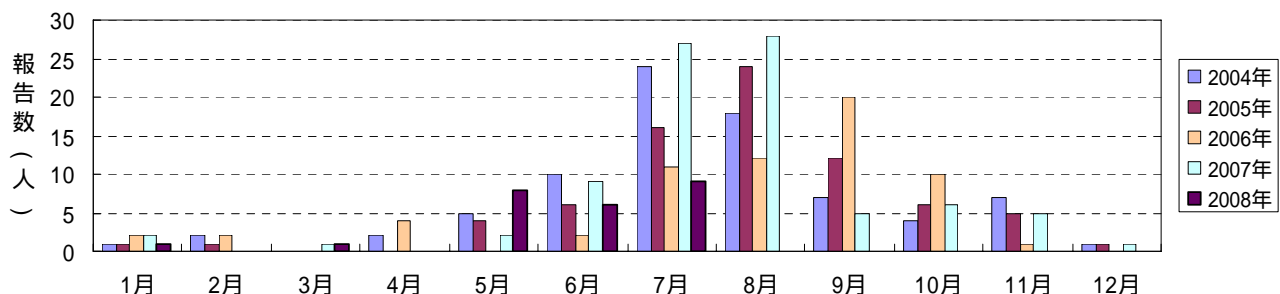
< 腸管出血性大腸菌感染症 >

7月の報告数は、30日現在で9例です。年齢の内訳は、10歳未満が3例、10代が2例、20代が1例、40代が1例、50代が2例でした。例年に比べれば少ないですが、毎年、夏に報告が多いので、注意が必要です。生肉(生レバー等)や生焼けの肉の喫食による感染が見られます。

啓発用チラシ「O157に注意しましょう」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf> も合わせてご覧ください。

腸管出血性大腸菌感染症月別報告数

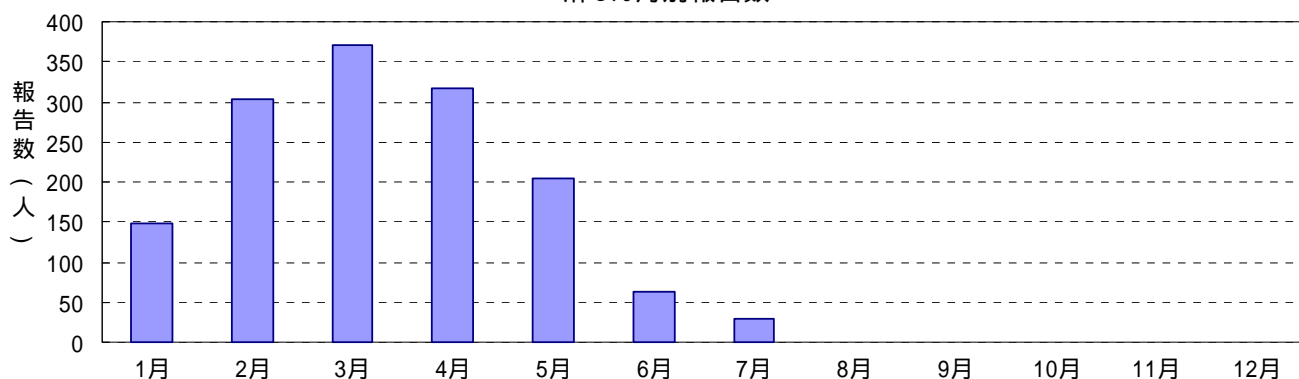


< 麻疹 >

1月から感染症法の5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。(国立感染症研究所ホームページ <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>)

横浜市では、第30週(7/21～27)までの累計報告数は1436例で、全国の報告数10457の13.7%です。年齢別では、約半数が10代で、予防接種前の0歳にも多く発症しています。また、全体の約半数が予防接種未接種でした。

麻疹月別報告数



7月1日～27日までの報告数は30例と、6月に引き続き減少しています。

2012年の麻疹排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

横浜市では、緊急対策として、未接種・未り患者への市費による予防接種(任意接種)を実施しています。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/oshirase/mr-kinkyu.html>

1歳～高校3年生に相当する年齢の未接種・未り患者は、この機会に早めに接種していただくことが重要です。横浜市の詳細については、「横浜市における麻疹患者届出状況(2008年)」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/measles/measles.html> をご覧ください。

《日本は、2008年～2012年の5年間で、麻疹排除を目指します》

風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握

1歳および就学前1年間の、麻疹風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底

5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

定点把握の対象

<咽頭結膜熱>

夏季に流行する疾患で、例年6月頃から増加が見られます。横浜市では、第21週から増加傾向となり、第30週は定点あたり0.97とやや高い値です。行政区別では、港北区(5.86)が高くなっています。川崎市は1.73と、横浜市より高い値です。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.47、全国は0.85でした。

啓発用チラシ「咽頭結膜熱(プール熱)に注意しましょう!」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/punf/pdf/intouketumaku2008.pdf> も合わせてご覧ください。

平成20年 週 - 月日対照表

第26週	6月23～29日
第27週	6月30～7月6日
第28週	7月7～13日
第29週	7月14～20日
第30週	7月21～27日

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

第2週以降増加傾向が続き、第23週に定点あたり3.67とピークを迎えた後は、減少傾向が続いていますが、過去6年間で最も高い値で推移しています。第30週も1.44と、この時期としては過去6年間で最も高い値です。行政区別では、港北区(7.57)、緑区(4.67)に多く見られました。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.17、川崎市は1.58です。全国は1.12でした。

<手足口病>

横浜市では、第23週から増加傾向となり、第30週は定点あたり4.05と、今シーズンで最も高い値になりました。行政区別では、泉区(13.25)、港南区(8.25)、緑区(7.67)、青葉区(5.33)が高くなっています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は9.10と、かなり高い値です。川崎市は2.55、全国は3.25でした。今後の動向には引き続き注意が必要です。

<ヘルパンギーナ>

横浜市では、第24週から増加傾向となり、第29週は定点あたり5.78とピークを迎えました。第30週は定点あたり5.20とやや減少しています。行政区別では、緑区(19.67)、泉区(14.25)、瀬谷区(12.00)、磯子区(7.75)が高くなっています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は4.99、川崎市は6.82、全国は3.59でした。今後の動向には引き続き注意が必要です。

<性感染症>

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

6月は、5月に比べて横ばい傾向です。15～19歳の若年層については、男性はありませんでしたが、女性は性器クラミジア感染症で2例、尖圭コンジローマで1例見られました。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ(内科)定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹(病院)定点：3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2008年7月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点は27件(鼻咽頭ぬぐい液)、眼科定点は1件(眼脂)、基幹定点は6件(鼻咽頭ぬぐい液4件、便1件、血清1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は上気道炎10人、気管支炎5人、手足口病5人、ヘルパンギーナ4人、口内炎3人、眼科定点は流行性角結膜炎1人、基幹定点は上気道炎2人、気管支炎1人、胃腸炎1人でした。

8月8日現在、小児科定点の手足口病患者3人と気管支炎患者1人からコクサッキーウイルスA16型が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点のヘルパンギーナ患者4人からコクサッキーウイルスA5型(2人)とコクサッキーウイルスA6型(2人)が、口内炎患者3人からコクサッキーウイルスA4型(2人)とコクサッキーウイルスA6型(1人)が、手足口病患者1人からコクサッキーウイルスA6型が、上気道炎患者1人からコクサッキーウイルスA5型が、別の上気道炎患者1人からアデノウイルス3型が、気管支炎患者1人からアデノウイルス7型が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

7月の感染性胃腸炎関係の受付は8菌株で腸管出血性大腸菌が検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は3件でA群溶血性レンサ球菌が2件から検出されました。

【 感染症・疫学情報課 検査研究課(細菌担当・ウイルス担当) 】